

茨城大学学報

第277号

平成20年2月～平成20年3月



理学部棟前の桜

INDEX

- ◆学生センターがオープン
- ◆フロンティア応用原子科学研究センター発足に向けての講演会を開催
- ◆カウンセラーと教職員の意見交換会を開催
- ◆人文学部主催・青山和夫教授 受賞記念講演会開催
- ◆平成19年度茨城大学卒業式
- ◆「大町櫻記」の石碑と説明板の設置
- ◆「NHK 県域デジタルTV放送」茨大タスクフォースだより

2月号

3月号

茨城大学総務部総務課広報係

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 「学生センター」をオープン

本学では、学生サービスのワンストップ化を目的に、学生センターの設置工事を進めてきたが、2月に竣工を迎え、2月21日（木）菊池龍三郎学長等が出席し、学生センター竣工式典を挙行了しました。

水戸キャンパスの共通教育棟1号館を改修し、従来からの学務課・留学交流課に加え、学生生活課と学生就職支援センターを同一エリアに配置し、学生移動のワンストップ化を実現、学生センターの中庭には「ライトコート」を整備し、学生の憩えるエリアとしました。

また、新しい学生用玄関を整備し、大きな「キャノピー（庇）」を設置、キャノピーは、学生センターのシンボルとなり、学生の課外活動等の多目的利用を可能とし、玄関ホールは、絵画等の学生作品の展示スペースとして利用されます。

改修工事の設計は、工学部都市システム工学科の寺内美紀子准教授（一級建築士）と大学院生等が中心となって策定したもので、従来にない斬新なスタイルは、竣工式典に出席した多くの教職員等から評価を博していました。

竣工式典では、菊池学長から本施設を利用し更なる学生支援に取り組んでいきたいとの挨拶がありました。



キャノピーの下で行われた竣工式典

◆フロンティア応用原子科学研究センター発足に向けての講演会を開催

去る2月27日（水）に水戸市内の常陽藝文センターにおいて、「茨城大学フロンティア応用原子科学研究センター」発足に向けた特別企画として、前総合科学技術会議議員で元東北大学総長の阿部博之氏を招き講演会を開催した。

研究センターは、新しい産官学連携をめざし応用原子科学の研究拠点として、21世紀の知的基盤社会の基幹科学技術をなすと期待される物質科学と生命科学で、中性子ビーム等を用いた原子スケールでの構造・機能解明による推進、および原子科学に関わる基礎的研究の展開を図り、企業と大学との新しい連携（イノベーション創生システム）の構築を行い、茨城県における新産業・新技術の展開に寄与することを目的として、同大がこの4月の設立準備を進めている。講演会には、茨城県、日本原子力研究開発機構などの原子力機関及び茨城県内企業の関係者など約150人の出席があった。

講演会は、菊池龍三郎学長の挨拶に続き、「21世紀の大学と地域の活性化」との題目で阿部氏の特別講演が行われ、「茨城県には、国を代表する研究機関と複数の総合大学および日立などの大企業が集積し、極めて恵まれた環境にある。」との指摘や「北関東さらには日本の中で、茨城県の存在意義をだしていくには、大学が中心となり、官民の研究機関や病院などと強力なネットワークを結成し、J-PARC 関連を含む産官学連携の茨城県モデルを提案すべきである。」との提言があった。

特別講演に引き続き、茨城県知事、内閣府原子力委員会委員長代理、（株）日立製作所日立研究所長及び中国科学院士より研究センターへ期待するメッセージが報告された。その後、茨城県企画部の今瀬肇科学技術振興室長より「茨城県中性子ビームラインと産業利用促進計画」の説明、研究センター設立準備室長の山形耕一副学長より「研究センター計画概要」の説明があった。更に、研究センター設立準備室研究・連携企画部会長の坂田文彦理学部長から、研究センターが世界的な研究拠点および新しい産官学連携の中心となるために関係者への一層の協力支援の依頼があった。

講演会の開催により、研究センターに対する今後の期待が高まるものとなった。



阿部博之氏の特別講演

◆ カウンセラーと教職員の意見交換会を開催

工学部では、去る3月4日（火）「工学部カウンセラーと教職員の意見交換会」を初めて開催した。「今！学生は何を考えているのか？」をテーマとして、カウンセラーの村上めぐみ氏および塚本美和子氏の2名と工学部教職員36名がお互いに意見の交換をした。

村上カウンセラーからは、ここ数年における学生の変化やカウンセリングで気を付けていること等の講話があり、塚本カウンセラーからは、学生が教員に相談に行った場合を想定したロールプレイを交えながら、学生の話に耳を傾け聞く姿勢等について分かりやすいアドバイスがあった。

意見交換の時間には、教員から、学生との関わりにおける体験談や、現在、学生への対応で困っている具体的な事例について紹介があり、カウンセラーと質疑応答が活発に行われた。

この意見交換会で、学科を超えた教員同士および工学部カウンセラーと教員との情報の共有、学生相談室のあり方について、理解が深まり今後の学生対応に大きく役立つ機会となった。



意見交換会の様子

◆人文学部主催・青山和夫教授 受賞記念講演会開催

平成20年3月19日、第4回日本学術振興会賞・第4回日本学士院学術奨励賞を受賞した青山和夫教授の今回の快挙・慶事を祝した、人文学部主催による受賞記念講演会が開催されました。

特に日本学士院学術奨励賞は20名以上の日本学術振興会賞受賞者の中からわずか5名という栄誉であることから、学内だけでなく学部外にも呼びかけての開催となり、学部内外から100名ほどの聴衆が集まりました。

快挙の意義を語り一層の精進を促す学部長の主催者挨拶、日本学士院における授賞式の模様を報告を含む学長挨拶に続き、約45分青山教授の講演が行われました。

「古典期マヤ人の日常生活と手工業生産」と題する講演で、西洋人侵略以前のアメリカ大陸の記述を補強し世界史をバランスのとれたものにするために「究極の石器の都市文明」である前600年頃から16世紀に至るマヤ文明の総合的研究が欠かせないこと、そのために青山教授は従来軽視されてきた石器の研究を通じて、古代マヤ国家の発展過程における交換の役割と性格、政治経済組織、手工業生産、職業の専門化、都市性や戦争の内実を実証的に検証し、日常生活の諸活動を復元したことを説明しました。

青山教授が演題の「手工業生産」にかかわって、体系的な使用実験を行い、高倍率金属顕微鏡を用いた分析法で石器に残る微細な傷跡（使用痕）を研究したことが今回の受賞につながりました。研究はチームの調査とともに行われ、青山教授はホンジュラス・グアテマラの共同調査で主導的役割を果たしています。

講演はパワーポイントを使い直観的に理解できるように構成された見事なもので（青山教授は授業名人で学内受賞歴もあり）、研究者魂にあふれた高度な研究の中身を垣間見ることができました。同時に具体的諸条件の中での調査における各国研究者・住民との交流、研究の苦労や家族の協力など、前進を続ける一人の研究者の実像全体が、ユーモアとエピソードを交えて印象的に語られました。



秋篠宮様ご夫妻を囲んでの記念撮影（一列目左端が青山教授）

平成19年度茨城大学卒業式

平成19年度卒業式は、3月25日（火）午前10時から茨城県武道館において、学長、役員、名誉教授等の参列のもとに挙行されました。

式は、本学吹奏楽団の前奏に始まり、菊池学長から学部、大学院及び専攻科の卒業生、修了生の学部等の総代に学位記、修了証書が授与され、学長告示、卒業生、修了生の全学総代 進士真也（農学部）の答辞と続き、最後に参列者全員で校歌を斉唱して閉会となりました。後輩や保護者が見守る中、今回巣立った卒業生は、2,177名でした。

◆平成19年度卒業式告辞

茨城大学長 菊池 龍三郎

学んだことを実社会で生かし、さらに学び続けてほしい

長く厳しかった今年の冬の寒さを忘れさせてくれるかのように、そしてあたたかも春が皆さんの卒業を祝ってくれるかのように、今年も梅の花が馥郁とした香りを漂わせています。

本日、茨城大学を卒業される2,177名の皆さん、卒業本当におめでとう。茨城大学を代表して心からお祝いを申し上げます。またご列席のご家族の皆さんにも心からのお祝いを申し上げます。



皆さんには、ただ今、おひとりおひとりに学士、修士あるいは博士などの学位記や修了証書をお渡ししました。皆さんは、これとは別に教員免許状などの様々な資格も手にされました。おひとりおひとりの学位記や修了証書に差はありません。それぞれが皆さんのこの何年かの努力の証しであります。

とりわけ、博士の学位を授与された理工学研究科の28名の皆さん、同じく博士の学位を授与された連合農学研究科14名の皆さんには、長年の努力を称えるとともに、皆さんが一人前の研究者として自立されたことを、私たちは大変喜んでおり、このことに心からの祝意を表したいと思います。

また今年度も、卒業生の皆さんの中には、学術、スポーツ、ボランティア活動、芸術等の様々な課外活動の分野で優れた成果や成績を収め、今年度は128名の皆さんが学長表彰を受けました。たとえば、関東甲信越体育大会で十連覇を果たした剣道部をはじめとして、本学の名声を高めてくれた方達が大勢いました。これらの方達の努力と活躍を称え、本学のために果たされた貢献に対して心からの敬意を表し、感謝したいと思います。

さて、卒業に当たり、私は本学を卒業する皆さんに次の言葉を贈りたいと思います。

それは「学びて思わざれば則ち罔（くら）く、思いて学ばざれば則ち殆（あや）うし」という言葉です。皆さんはおそらくどこかで聞いたことがあると思います。

言うまでもなく、今から二千五百年前の中国の古典、論語に収められている孔子の言葉です。どういう意味か。私なりに解釈すれば、知識がいくら沢山あっても、そこから更に自分で深く、そして広く考えないと、知らないに等しいこと、さらに、自分が持っている様々の知識を相互に関連づけながら自分の考えを発展させないと、学んだことにはならない。学んだ意味がない。学んだことを実際に様々な問題場面に当てはめて欲しい。ぶつけてみて欲しい。どうなるか、使えるのかどうか自分で考えて欲しい。その場合、必要と思われる色々な知識を関連づけて欲しい。それをしないと、折角学んだ知識も、結局は上っ面だけの理解で終わってしまう。それを戒めた孔子の言葉だと思います。

今、日本の教育にも厳しい反省が求められています。知識と言えばテレビで大手を振っているクイズ的知識、クイズ的知識の多いか少ないかを競うことが大流行であります。たしかに、そうしたクイズ的なものの知り方、クイズ的な知識は持っていても邪魔にはならないとは思いますが。しかし、それでは学びて思わないに等しい、それは結局は学んでいないに等しい、知らないに等しいのだと、孔子は言っているのだと思います。つまり、孔子のいった言葉の意味は、知識を色々な問題場面に当てはめたり、知識と知識を関連づけてたりして、学んだ知識の奥行きと広がりや深さをつくり出すこと、そこから新しい知識の世界が拓けるということだと思ふのです。

また、「思いて学ばざれば則ち殆うし」とは、自分だけの狭い考えに頼り、人の考えを受け入れないようではいけない、だからこそ学ぶ必要がある、学ばなくてはいけないのだ、という意味だとされています。私は、本日ここでは、この言葉の前半部分、すなわち、「学びて思わざれば則ち殆うし」という言葉を、かなり意図的に、本来の意味とはかなり異なる意味になるかとは思いますが、少し例を引きながら、お話してみたいと思います。

先日、私は、ある会合に出席しました。そこで、ある国立大学の先生が小中高校の先生方を相手にこういう話をされるのを聴きました。その講演は小中学校で学習離れが深刻になる中で、ものの知り方、知識のあり方についての大学も含む学校教育の責任、教師の責任をどう考えるかというテーマのものでした。

その中でこの先生は、次のようないくつかの例を出して、日本の学校では、子ども達に、ただ知識を覚えさせるだけで、知識を関連させる教育がない。そのために、そこから子どもたちの頭の中で、様々の新しい考えを展開させることができない。子ども達へのそういう働きかけが非常に少ないとして、教師の責任を問いながら、いくつか例を挙げられました。

例えば、学校の社会科の地理の授業では、日本には三つの海流、海の流れですね、海流があると教える。言うまでもなく、日本海流、即ち黒潮、それから対馬（つしま）海流、そして千島海流です。この三つの海流の中で「千島海流」は、寒流で、この海流を別名「親潮」と呼ぶと教える。なぜ親潮というのかについては、「海水の栄養が豊富で沢山の魚類を育む海流である、という意味でそう呼ぶ」と教える。多くの先生方は多分そう教えている。一方で、理科の授業では、「水の温度が高くなればなるほど、水に溶けている気体の量は少なくなる」と、いわゆる溶解度のことを教える。つまり、海水の温度が高ければ高いほど海水に溶けている酸素の量は少なく、反対に海水の温度が低いほど酸素を沢山含むということを教える。ところが、この社会科と理科の二つの知識がなかなかつながらない。教師も関連づけて教えないことが多い。しかし、もしもこの二つの知識がつながるとどうなるか。そこから、なぜ親潮というのか、なぜ魚類が豊富なのかを理解するようになる。そこから更に、暖流に棲む魚類の形態や構造と寒流に生きる魚類の特徴や違いも明らかになってくる。つまり、様々な知識の広がりや更に新しいことを知りたいという欲求が自ずとわき起こる、学ぶことの新たな展開が期待できる、というものでした。

また、物体は温度が上がると体積が増えることは誰でも知っている。そこで「鉄道のレールの繋ぎ目は、夏にレールが膨張することを考慮して隙間が作ってある」とことは誰でも容易に理解できる。ところで、新幹線は一本数キロメートルもある超ロングレールを使っている。さて、繋ぎ目はどうなっているのだろうか。隙間が広いと脱線してしまうけれども、などとまた疑問が沸き起こってくる。石油産出地域である西アジアは、砂漠地帯で寒暖の差が激しいはずである。石油のパイプラインの繋ぎ目はどうなっているのだろうか。隙間は作れないし、繋ぎ目をゴム製にしたらすぐ駄目になってしまったそうである。ではどうするか。皆さんはどう考えますか。

「閉じ込められた液体の一部に圧力を加えると、その圧力は液体のすべての部分に同じ大きさと伝わる。」というパスカルの原理は、中学校で誰でも学んで知っている知識である。しかし、これを確かめるために、何も実験室を用意する必要はない。毎日利用するエレベーターはこのパスカルの原理で動いていると知れば、物理の嫌いな人でもなるほどと思ひ、エレベーターに乗るたびに、ああパスカルの原理と思う筈である。

皆さんは、これから、この世界を生きていくためには、色々な問題場面で、大学で学ん

だ様々な知識を適切に結びつけたり、関連づけたり、補ったりしながら当てはめてみる、使ってみることが必要だと思います。知識を知ることとは、同時に関係を知ること、関連づけて物事を理解することでもあると考えます。自分の知識を色々な問題場面にぶつけてみて、そこでさらに疑問を触発させながら自分の知識の世界を広げ、深めていく、これが「学びて思うこと」であり、そうすれば、知識は、知ることは、危ういものではなく、逆に確固としたものになる筈です。

今述べたことは、小学校や中学校の先生向けのお話なのですが、私は大学を卒業する皆さんにも当てはまる話だと思います。

今の世界同時不況の引き金になると懸念されているアメリカのサブプライムローン問題とその背景を、どう構造的に理解すればよいのでしょうか。私などは、いくら聞いてもよく理解できません。これが、人文学部社会科学科を卒業する皆さんだったら、おそらく大学で学んだ様々な知識を関連づけながら、この一連の問題と、なぜ各国の財政金融当局が右往左往するのかを明快に説明してくれると思います。

よい事例があります。今年度、私たちの人文学部人文学科の若い教授である青山和夫教授が、古典期マヤ文明の研究によって、日本学術振興会賞を受賞しました。インカ文明やマヤ文明という言葉は知っていると思いますが、あの中米マヤ文明の研究で、国際的に極めて高い評価を得ている研究業績が認められたためであります。マヤ文明はインカ文明とは時代的にも内容としても大きく異なる文明で、インカ文明よりも千年も古く、日本で言えば弥生時代後期には既に存在した文明であると、実は私も始めて知ったのです。実はこの賞の昨年度の実績者の中には、皆さんもご存じと思いますが、再生医療研究で次のノーベル賞候補と期待され、今大変注目を浴びている京都大学の山中伸弥教授がおります。

更に、その受賞者の中から日本学士院学術奨励賞受賞者五人が選ばれたのですが、青山教授は文化系でただひとりこれに選ばれ、今月をはじめ、日本学士院において、秋篠宮殿下、同妃殿下ご臨席のもとに授賞式が行われました。大学にとっても名誉なことでありましたが、この賞は、いずれ理科系ではノーベル賞を、文系の研究には文化勲章を狙って貰いたいとの目的で創設されたものと聞いております。

さて、マヤ文明は鉄器を使わずに専ら石器を用いて極めて高度な文明を作り上げたのですが、この若い青山教授の研究は、マヤ都市遺跡で発掘した膨大な石器をひとつひとつ、電子顕微鏡を使い、石器に付着した傷跡を丹念に調べ、整理分類することにより、それが何に使われたものかを明らかにし、さらに発展させ、体系化し、そこからマヤ都市国家の社会的な階層構造までも解明したものでした。その過程で教授は、従来のような知識や理論を、それらが本当に正しいかどうかを検証し、そこに自分が明らかにした新しい知識を付け加えることによって組み立て直し、新しい自分の体系と理論を、独創的な方法で、しかも気の遠くなるような作業を根気よく続けることにより創り上げたのでした。これにより、教授は、今やマヤ文明の研究では世界トップレベルの研究者に数えられるに至りました。

私が、なぜ本日これらのことを皆さんに申し上げたのかというと、知識を単に覚えると

いうだけでは学んだことにはならない。学んだことを実際に、色々な場面で使ってみて欲しい、使いながら修正したり広げたりして欲しい、これが学ぶということの意味ではないかと教えてくれた気がしたからであります。皆さんは、本学で沢山のことを学ばれました。是非、皆さんには、この本学で学んだ豊かな一般教養と専門の知識を生かして、混迷し、進むべき方向を見失いつつある世界や日本社会をしっかりと支える人間、つくりかえることのできる人材になって頂きたいと心から願っています。

今、皆さんは、本学を旅立ちます。これからは健康と自己管理に十分に気を付けてください。これは大学を卒業し、独り立ちした社会人として要求される最低限の条件です。これから入るそれぞれの進路で、思う存分に頑張ってください。あるいは時として辛い時もあるかと思えます。自信をなくすこともあるかもしれません。しかし、そういう時でも、決して投げやりになったり、悲観的になったりしないで、とにかく頑張ってみてください。人間関係がうまくいかず悩むこともあるかと思いますが、そういう場合でも、自分で人間関係を変えてみる努力もしてみてください。とにかく、焦らずじっくりと、仕事や研究に励んでください。何よりも人生は耐えることでもあると私は思っています。耐える中で見えてくるものも多い筈です。それから職場では、一日も早く頼りにされる存在になって下さい。

私達茨城大学の教職員は、みなさんがそれぞれの進路で、元気に精一杯活躍して下さることをいつでも祈っています。そして誰よりもみなさんの後輩達はみなさんの頑張りに心からの声援を送っています。是非、茨城大学の多くの後輩達の道しるべになるような活躍をして下さるよう心から期待してやみません。そして、皆さんの茨城大学は、皆さんが誇れる大学になるようこれからも努力することを誓います。

最後に、改めて卒業を祝い、これからの皆さんのご活躍とご健康を心から祈ってはなむけの言葉といたします。卒業本当におめでとうございます。



◆「大町櫻記」の石碑と説明板が設置されました

このたび、講堂と共通教育棟の間の緑地に「大町櫻記」の石碑と説明板が設置されました。この石碑は、長い間、茨苑会館前の大銀杏の根もとに半ば忘れ去られた状態で建っていましたが、水戸キャンパスの歴史を物語る貴重な史料として移設されたものです。

水戸の生んだ漢学者栗田勤による碑文には、1909（明治42）年、この地に兵営が置かれ、歩兵第二聯隊が千葉県佐倉城から、工兵第十四大隊が同習志野から移駐したことを喜んだ水戸市大町の市民有志が、将兵に末永く花を愛で心を癒してもらおうと300株の桜苗木を贈り歓迎の意を表したこと、兵営内に植えられた桜木は「大町櫻」と名付けられたことが記されています。



「大町櫻記」の石碑と説明板（共通教育棟1号館前）

茨城大学とその周辺一帯は、1909年から第二次世界大戦終結の1945年まで、旧日本国陸軍の水戸衛戍地と呼ばれる軍用地で、歩兵営・衛戍病院、工兵営、練兵場、射撃場、軍人墓地などがありました。水戸衛戍地は、茨城県や水戸市が各方面から寄付を募り官民挙げての誘致運動により実現したもので、水戸市郊外の東茨城郡常磐村・渡里村にまたがる山林原野・耕地・宅地など20万坪に及ぶ土地が転用されました。当時のわが国では、各地で同様の誘致運動が展開されており、軍隊の駐屯による社会的・経済的効果に寄せる地元の期待は極めて大きなものでした。

戦後、国有地であった旧軍用地は、その経過はさまざまですが、主として公共用地に転用されました。歩兵営跡は茨城大学の敷地となり、東原の旧制水戸高等学校や水戸城内の茨城師範学校などを統合した文理学部・教育学部・大学本部が置かれ、工兵営跡には附属中学が入りました。東原の教職員宿舎、三の丸の附属小学校はこの名残です。現在の野球グラウンド・テニスコート付近にあった衛戍病院は、戦後国立病院となり1965（昭和40）年に東原の旧水戸高等学校跡地に移転しましたが、さらに2004（平成16）年に国立病院機構水戸医療センターとなり茨城町に再移転しています。練兵場跡は茨城大学の運動場として使われていましたが、茨城県に移譲され県武道館・野球場・陸上競技場などのある運動公園になりました。細長い射撃場跡は少年鑑別所・水戸拘置支所・市立堀原小学校・公務員宿舎・市営住宅・県公害技術センターなどになっています。軍人墓地は水戸市堀町公園墓地に使われています。

「郷土部隊」となった歩兵第二聯隊と工兵第十四大隊は、朝鮮の警備のほかシベリア出兵・満州事変・支那事変などに外地に派遣されましたが、1940（昭和15）年、軍備改変で満州

(黒龍江省)に永久駐屯することになり水戸を去りました。これ以降終戦まで、歩兵營には総称して東部三七部隊、工兵營には総称して東部第四二部隊と呼ばれる新編成部隊・留守隊・補充隊などが置かれ、兵員の召集・入營・部隊編成・補充員の送出などを行っていました。

なお、衛戍地に関係する歴史的石碑は他にもあります。一つは茨城交通車庫裏の小公園に建立されている「尼港殉難者記念碑」です。シベリア出兵で動員された歩兵第二聯隊のうち第三大隊が1920(大正9)年の尼港事件で多くの民間人とともに全滅した悲惨な出来事を記念したものです。因みに第二聯隊は、大戦末期に満州から中部太平洋ペリリュー島守備に転用され、米軍との戦闘で玉砕しています。また、本学の渡里テニスコート近くには、「健兒壹萬野營之跡」の碑があります。1929(昭和4)年に県内で行われた陸軍特別大演習の際、堀原練兵場で天皇の観閲を受けるため近県から召集された青年男女のテント生活や観閲式の様子を伝えています。

概説(茨城大学名誉教授 朝野洋一)



桜の花の下、碑文の前でくつろぐ学生

－「NHK 県域デジタルTV放送」

茨大タスクフォースだより 2月号－

NHK水戸放送局の公開スタジオで、本学の学生が制作した映像作品が紹介されました。スタジオでは、企画・撮影等に当たった学生たちが司会者とトークを行いました。この模様はNHK 県域デジタルTV放送で生放送されました。

平成20年2月14日(木)・・・茨大生レポート 水戸の“道祖神”を探る

(教育学部情報文化課程 情報文化広報プロジェクト

社会情報コース4年次 岩田直樹くん ほか)

道端には、よく石仏が置かれている。その種類はさまざまであり、どのような目的で置かれているかも、それぞれによって違う。水戸市内でも石仏は多く見られるが、なかでも中丸町にある道祖神は、江戸時代(1774年)に造られた珍しい双体の道祖神である。双体道祖神は、長野県や群馬県に多いが、水戸市内にはここだけなのだ。この双体道祖神について、私たちは明治期の水戸の地図や地域住民へのインタビュー、「水戸の石仏」の著者である海野庄一先生に話を聞くなどし、なぜこの双体道祖神が中丸町に建てられたかを調べ、当時の人々が何を願っていたのかに迫りました。



写真は

大木アナウンサーと牧山キャスター

教育学部

情報文化広報プロジェクト

の皆さん

NHK水戸放送局公開スタジオにて：

左から、大木アナ、岩田くん、星さん、窪田さん、宮沢さん、牧山キャスター

NHKでは、地元にある大学で学ぶ学生たちの自由な発想による映像作品を紹介し、視聴者に興味を持ってもらえるコーナーを目指しているそうです。皆様のご協力をお願いいたします。

※デジタルテレビ放送は、生協の1階食堂と大学会館食堂のテレビで見ることができます。

－「NHK 県域デジタルTV 放送」

茨大タスクフォースだより 3月号－

NHK水戸放送局の公開スタジオで、本学の学生が制作した映像作品が紹介されました。スタジオでは、企画・撮影等に当たった学生たちが司会者とトークを行いました。この模様はNHK 県域デジタルTV放送で生放送されました。

平成20年3月12日(水)・・・茨大生レポート 茨城発見 ここに鉄道があった！

(人文学部人文コミュニケーション学科

3年次 生田目李奈さん)

上水戸のカスミ周辺を歩きかう人々に、「昔この前を鉄道が走っていた」と言うとみんなが驚く。それを知って改めて道路を見ると、そこに現代の道路とは違ったリズムがあるように感じられ、昔のゆったりとした生活が懐かしく思えてくる。

茨城鉄道。1971年に廃線となってしまったこの鉄道は、かつて赤塚から茨城大学の前を通過して、御前山まで開通していた。その軌道跡のほとんどは道路となって残されており、その沿線を辿ると、鉄道があった当時の面影を残す遺物が点在している。

この映像では、旧軌道跡を辿ったり、元・駅長へのインタビューや当時の写真・地図を紹介することを通じて、茨城鉄道をほのほのとした懐旧モードで描き、時代の移り変わりを改めて感じて、得たもの失ったものを考え直すきっかけとしたいと思い制作しました。



写真は

大木アナウンサーと牧山キャスター
人文学部
生田目李奈さん

NHK水戸放送局公開スタジオにて：

左から、大木アナ、生田目さん、牧山キャスター

NHKでは、地元にある大学で学ぶ学生たちの自由な発想による映像作品を紹介し、視聴者に興味を持ってもらえるコーナーを目指しているそうです。皆様のご協力をお願いいたします。

※デジタルテレビ放送は、生協の1階食堂と大学会館食堂のテレビで見ることができます。